

冒険者様のリストランテ

1 とにかく死ぬほど腹が減っている。何かうまいものを食わせる店はないものか。きみはそんなことを思いながら宿への道を歩いていた。すると、そっけなく「リストランテ コースのみ」と書かれた看板が目についた。リストランテ、つまり料理店だ。字を見ただけで喉がぐびりと鳴った。この店……絶対にうまい。

入ってみよう→2 宿で安く済まそう→3

2 きみが店に入ると、陰気な顔をしたウェイターが「いらっしやいませ」といった。「当店では料金はいりません。ただし、料理をお召し上がりになるためには戦っていただく必要があります。生命の保証もいたしません。それが嫌ならばどうかお帰りください」

面白い。戦ってやろうじゃないか→4 帰ろう。戦いたくはないし→3

3 かくしてきみは挑戦に背を向け、宿に帰って安全な食事をわびしげにとった。残念だが、今回は冒険回数を増やすことはできない。増やしたかったら、明日の晩にでもあの店へもう一度足を運んでもらうしか……。 END

4 ウェイターはきみに食前酒を尋ねる。

「アペリティーボは、快活になるスパークリングワインと気分が冴えるベリーニ・ミモザのどちらになさいますか？」

スパークリングワイン→5 ベリーニ・ミモザ→6

5 ウェイターはボトルの栓を開け、渡してくれた。ワインを一口飲むと、体力が回復した気がした。活性薬として扱う。ボトルにはあと3回分残っているが、店の外へ持っていくと鮮度が落ちて活性薬としての力はなくなってしまう。気力充溢して→7

6 ベリーニ・ミモザはワインを柑橘系の果汁で割った軽いカクテルだ。飲み干すと技が冴えたように感じる。能力を1点上げること（ただし6以上にはならない）。この効果は店にいる間だけ続く。気力充溢して→7

7 ウェイターはカトラリーとしてナイフとフォークと小皿を渡してくれた。きみがF系ならば「名のある武器」として、T、M系ならば「特殊な短剣」として扱うこと。部屋に入れてくれたウェイターは、ひとこと「まずはストウツィーノからです。どうかご無事で……」といってドアを閉め、鍵をかけた。ストウツィーノとは前菜の前の軽いおつまみのことである。→8

8 頭の上から、ひと口大のパンのようなものがいくつか落ちてきた。サイコロを1個振れ。それが落ちてきたパンの数だ。パンはきみに当たると爆発した。落ちてきた数だけサイコロを振り、6が出た回数だけHPを1点ずつ減らせ。とんでもないトースト方法もあったものだ！

気絶したなら→9 生き残れたらトーストはきれいに皿の上に並ぶ→10

9 気がついた時、きみは身ぐるみはがされて店の裏の路地にいた。料理を食べる価値もないと判断されたらしい。装備を全部失うこと。きみは宿屋にとぼとぼ帰った。救いとしては冒険回数が1点増えたことだけだ……。 END

10 パンは香ばしくて軽い口当たりだった。さっき一口飲んだ酒と相まって極上の味だ。アペリティーボ、ストウツィーノときたら次はアンティパスト、前菜だろう。来るなら来やがれ！ サイコロを1個振ること。

奇数なら冷たい前菜だ→11 偶数なら温かい前菜だ→12

11 目の前に色とりどりのゼリーが出てきた。問題はそのゼリーが驚くほどに巨大で、しかも君を食べようとするかのようにうねうね動いていることだ！ 戦闘せよ。敵はHP1、能力1、ダメージ1である。

勝った→13 負けた→14

12 フリッターが出てきた。魚のフリッターらしい。なぜなら、それは魚の姿のまま揚げられていて、手足までついていて襲ってきたからだ！ 戦え！ 食らいつけ！ 敵はHP1、能力2、ダメージ1である。

勝った→17 負けた→14

13 倒したゼリーを一さじ分フォークですくって口に入れてみる。さわやかで芳醇。まるで高原を吹く風のような涼気だ。ゼリーが口の中でとろけて消えると、残りのゼリーもすぐに溶けてなくなってしまった。くやしいがこまでうまいと、プリモ・ピアット、メインの前のスープかパスタも期待したくなってくる。サイコロを1個ふれ。

偶数ならパスタだ→15 奇数ならスープだ→16

14 きみは力尽きて気を失った。気がついたとき、きみは何かの機械の中に顔だけ出して埋まっていた。ウェイターの冷酷な声がする。

「あなたからは、代金としてエキスをいただきます。それでは」

エキスって何なんだ、と言いかけた時、機械が動き出した。強烈なる苦痛。何であれエキ

スがしぼられているのはほんとうのようだ。サイコロを 1 個ふれ。その年数だけ動いて機械は停止し、きみは冒険回数を 1 点得て解放される。きみの精神がそれだけの期間、正気を保てることを祈る。では楽しい拷問の時間を過ごしていただく……。 END

15 天井からよろよろとパスタが流れてくる！ きみを絡め取ってしまおうというこ
とらしい。動きが止められる前に食べて状況を打開せよ！ パスタは 4 体の、HP1 能力
1 ダメージ 2 の敵とする。戦え！

勝った→18 負けた→14

16 きみのカトラリーがスプーンに変形した。(能力に変更はない) そして目の前には火
のついたコンロがせりあがってきた。その上に乗っている鍋のようなものは……ミミック
だ！ ミミックは苦しきのあまり攻撃をしてくる。戦え！ ミミックは HP4 能力 2 ダ
メージ 2 だ。

勝った→19 負けた→14

17 心臓にとどめを刺して頸動脈にかぶりつくと、香ばしく揚がった極上のフリッターの
味がした。フリッターを咀嚼して飲み込むと、床から何かのマジックハンドのようなものが
現れて残りのフリッターの死体(?)を片づけてしまった。もうちょっと食べたかったのに。
しかたない、プリモ・ピアット、メイン料理の前のスープかパスタに期待することにしよう。
サイコロを 1 個振れ。

偶数ならパスタだ→15 奇数ならスープだ→16

18 パスタはニンニクのよく効いたオーソドックスなペペロンチーノだった。オリーブ油
の風味が何とも言えずにうまい。食いちぎって倒すと、床からマジックハンドが出てきてス
パゲティを片付けた。この店はほんとうに何でもありのようだ。さて次は、コースが順当に
進んでいるとするとセコンド・ピアット、メインの料理だが……。サイコロを 1 個振れ。

奇数なら魚料理だ→20 偶数なら肉料理だ→21

19 ミミックは倒されると蓋をばかりと開けた。中では何かの液体がぐつぐつ言っていた。
異国風のスパイスの香りがあまりにも食欲をそそり、きみは思わずスプーンを突っ込んで
ひと口飲んでしまった。うまい。トマト味のモツ入りスープ。憑かれたようにスプーンを動
かしていると、スープのほとんどを飲み干してしまっていた。はっと顔を上げると、床が開
いてミミックの死体(?)をマジックハンドが片づけていた。気づけばスプーンもフォーク
に戻っていた。やれやれだ。順当なコース料理だと次はセコンド・ピアット、メインの料理
だが……。サイコロを 1 つ振れ。

奇数なら魚料理だ→20 偶数なら肉料理だ→21

20 きみが立っている場所を除くすべての床が消え、一面の水面になった。魚釣りをしろというのだろうか、ときみが首をひねったとき、一匹の魚が海面から見事なジャンプを見せた。きみにはそれがサメに見え、サメにはきみが肉料理に見えたらしい。サメが襲ってくる！ 食うか食われるか、まさにメインディッシュにふさわしい！ サメの能力値は以下の通り。
HP4 能力2 ダメージ3 戦え！

勝った→22 負けた→14

21 きみの目の前で壁が大きく開き、何かが君のほうに突撃してくる。牛だ！ 怒り狂ってきみを突き殺そうとする牛を、きみは食い殺すことができるか！ 牛の踊り食いなんて勘弁してくれだが、戦うしかない！ 牛の能力値は以下の通り。HP6 能力2 ダメージ2

勝った→22 負けた→14

22 もう口まで総動員して敵を食い殺した。うわあ、着ているものが血まみれに……と思ったら血はすべてさらさらとした埃になって滑り落ちてしまった。そういえば食べた時の肉の食感にはたしかに塩味とスパイスが聞いていた感じがしたから、たぶんこれも調理された「料理」なんだろうが、ワイルドでうまかったとしても二度と食いたくはない料理だ。でも待てよ。この料理(?)には野菜の付け合わせがなかったな。ということは、まさか、本気でフルコースなのか？ 野菜料理、コントロールがあるのか……？ 気配を感じ、恐る恐る背後を見たきみは、自分の考えが正しかったことを悟った。植物のつるが絡みついてくる。巨大な食虫植物が、きみを食べようとしているのだ。生野菜サラダかよ！ きみは全力でつるにあらがい、カトラリーを振り回した。植物と戦え！ HP2 能力2 ダメージ2だが、植物には手加減するだけの知能がないので(D)がつく。負けたらきみは食い殺されるのでよろしく。

勝った→23

23 食虫植物の茎に食らいつくと、上質のルッコラのような味がした。塩気もスパイスもオリーブ油の感じも上等だ。そのままバリバリ食べ倒し、食虫植物にとどめを刺した。残骸をマジックハンドが片づけてくれるのを見守る。すると天井からマジックハンドが伸びてきて、きみに何種類かのチーズの載った小皿を示した。フォルマッジイということらしい。リコッタとモッツァレラがうまそうだ。どちらにしよう？

リコッタ→24 モッツァレラ→25

24 リコッタは実にうまかった。だが、リコッタチーズを発酵させていた微生物は、きみの体内で気づかれずに恐るべき戦いを始めたのだ。サイコロ1個を3回振ること。能力値以下の数字が1回も出なかったら、免疫系統がチーズの微生物に負けて、きみの身体は特大

のリコッタチーズになってしまう。

生き残った→26

25 モッツァレラは実にうまかった。だが、モッツァレラチーズを発酵させていた微生物は、きみの体内で気づかれずに恐るべき戦いを始めていたのだ。免疫系統が微生物をねじ伏せる前に、きみはサイコロ 1 個を振っただけの HP を失う。

HP が 1 点でも残った→26 HP が 0 以下になった→14

26 床から白いジェラートとエスプレッソの載ったテーブルが持ち上がってきた。スプーンと砂糖つぼ、それにジェラートを食べる銀のスプーンも一緒だ。ちょうど喉が渴いていたところだが、食べようか、どうしようか……？

食べる→27 やめておく→28

27 ジェラートとエスプレッソの甘さとほろ苦さは、きみの疲れ切った体をリフレッシュさせた。HP を最大値まで回復させること。→28

28 ウェイターがディジェスティーヴォ、食後酒としてグラッパを持ってきてくれた。

「コースはお楽しみいただけたでしょうか？」

また来るよ→29 二度と来るか→30

29 「では、そのカトラリーは来店記念としてサービスいたしましょう」

カトラリーを荷物に加えること。→30

30 きみは、妙な時間だったな、と思いながら店を出て、宿への帰路に就いた。あれだけ食ったのになんか猛烈に腹が減った気がする。宿へ帰ったら安全な食事をしよう、それがいちばんだ……と思ったきみの前に、最後のアクシデントが襲い掛かってきた。ごろつき 2 人に絡まれたのだ。それぞれ HP2、能力 2、ダメージ 2 である。戦って倒さなければ、きみは宿に帰りつく前に装備を全部奪われてしまうことになる。勝ったにせよ負けたにせよ、いずれにしても今日の冒険はこれで終わりだ。冒険回数を 1 点増やすこと。楽しんでくれたかな？ END